む　ら　起　こ　し
～農村の挑戦～

49期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

奈良県明日香村が行なっている、棚田を都会の人に貸し出して農作業を体験してもらおうという「明日香の会」への参加をきっかけに、村おこしに興味を持った。

過疎化がどんどん深刻な問題になる中、ほとんどの市町村で何らかの村おこしのイベントが行われているが、それらは成功しているか。そもそも、村おこしの主旨とは何なのか。そのような疑問から、このテーマを設定した。

Ⅱ　研究方法

(1)　文献調査　　図書館で参考文献を探し、全国の村おこしについて調べる。
また、村おこしに関する新聞記事を切り抜く。

(2)　アンケート調査　　文献などから興味を持ったいくつかの村に手紙同封のアンケートを出し、村の人の立場を探る。

(3)　実地調査　　「明日香の会」に参加し、村おこしを自ら体験してみる。

Ⅲ　研究内容

1．過疎化について

(1)　過疎地域の現況

新過疎法に基づいて公示されている過疎地域市町村の数は、平成６年４月１日現在で、1199団体である。その内訳は、市41団体（3.4%）、町774団体（64.6%）、村384団体（32.0%）で、大部分が町及び村となっている。

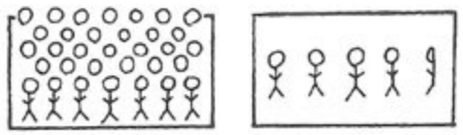
過疎地域の分布状況は、右の図のとおりである。ブロック別にみると、北海道における過疎地域の（面積・人口においての）比率が著しく高く、九州、中国、四国も相当の高率を示している。

▲図１　過疎地域分布図

過疎地域市町村は、神奈川県と大阪府を除く45都道府県に存在し、全国の市町村総数に占める過疎地域市町村の割合は37.0%となっている。また、国土総面積に占める過疎地域市町村の面積は47.7%となっており、人口密度は45人／㎢である。この人口密度は、全国の人口密度327人／㎢と比較すると極めて低い。この差を絵で表しみたものが図２である。過疎地域市町村の人口密度をブロック別にみると、北海道、東海が低く、九州、沖縄が相対的に高くなっている。

国土庁のアンケートによると、人口減少の原因は「就業の場の不足」、「第１次産業の不振・低迷」のように就業・産業に関するもののほか、「生活の便の悪さ」、「交通の便の悪さ」などが多くあげられている。

▼図２　全国と過疎地域の人口密度の比較

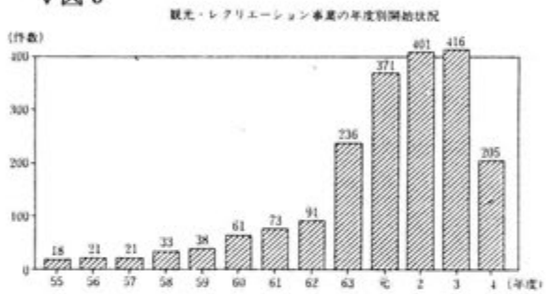


また、25～39歳階層の未婚女性１人に対する未婚男性の割合は、過疎地域2.41人と、全国の1.92人と比べかなり大きくなっている。このような人口構成が、いわゆる農山村の嫁不足問題の背景にあると考えられる。

(2)　観光・レクリエーション事業

最近の日本では、余暇の増大、価値観の多様化などを背景に、ゆとりある生活への志向が高まり、ふるさと体験、自然体験やスポーツ、健康をコンセプトをしたレジャーが盛んになってきている。

▼図３



過疎地域を訪れた観光客は、昭和60年を100とすると、平成３年は133、平成４年は138と約４割近く増えている。延宿泊客数についても、平成４年は約6600万人と昭和60年の約1.3倍に増加している。

市町村においても、近年、自然体験施設、創作工業施設、交流施設などを複合的に整備し、観光・レクリエーション事業に積極的に取り組む団体が増加している。図３を見ると、昭和58年以降、年々開始される事業は増加してきたが、平成４年度は景気の動向などを反映し、一転して減少となっている。

(3)　都市との交流

過疎地域には、豊かな自然、新鮮な産物、伝統のある文化、習俗といった大都市にはない地域資源があるが、最近における価値観の多様化と相まって、都会の人々のふるさと志向が高まっている。また、過疎地域市町村においても、都市との交流を地域活性化の方策として位置づけ、積極的な交流に取り組んでいる団体が多くなっている。

▼図４

図４は、過疎地域市町村における都市との交流の状況をみたものである。「イベントの実施」という回答が最も多く、全過疎地域市町村の５割以上の団体が何らかのイベントを実施していることになる。

現在行っている交流について今後の方針を聞いたところ、「拡大したい」と「維持・継続したい」という回答が多数を占めており、交流の拡大には積極的であることがわかる。

２．村おこしについて

(1)　京都府美山町の村おこし

村おこしとは具体的にどういうものなのか、アンケートの返答として村の資料が送られてきた京都府美山町の取り組みを紹介する。

〈第一期村おこし　農林業の振興〉

キャッチフレーズ：「田んぼは四角に　心は円(まる)く」

（昭和45年～昭和52年）

高度経済成長期のあおりをうけて過疎化がすすみ、さらには、減反政策が拍車をかれて「山が里におりてくる」「若者がいない」など農地の荒廃化が目立つようになり地域資源や環境の保存上、重要な課題となる。

（昭和53年～昭和55年）

集落の活性化に向け、意向調査・集落懇談会を実施し、住民要求を掘り起こすとともに、町内全集落に「農事組合」「造林組合」を設立し、「住みよいふるさとづくりをめざして」の実施方針を作成する。

（昭和54年～昭和63年）

実施方針を実現するために「地域主義」「みんなが参加する農業へ」と言われた新農業構造改善事業をはじめとした、国・京都府の補助事業を導入した。

土地基盤整備を中心に農業近代化施設、地域・集落環境施設整備（集落センター・農業振興総合センター・農村広場など）を実施した。

その結果、「田んぼは四角に心は円く」のスローガンのもと、農地は見違えるように変わり、多くの集落で多彩な集落営農が実践された。

〈第二期村おこし　都市との交流と村おこしの推進〉

キャッチフレーズ：「豊かな自然を生かした村おこしの推進」

（平成元年）

役場内に「村おこし課」を設置し、「村おこし元年」と位置づけ、旧村単位に「村おこし推進委員会」を設置、地域住民自らの創意・工夫による「村おこし事業を展開してきた。

そしてこの年、都市住民との交流の一大拠点「自然文化村」を開設、ふるさと回帰現象にのり、利用者は年々増加し、平成７年度の利用者８万人を突破した。

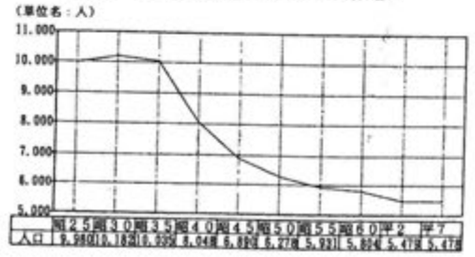
（平成３年）

農業・農村の活性化をめざした「緑と清流の京都美山塾」を開講した。

これが、京都府美山町の村おこしの取り組みの流れである。しかし、図５を見ると、必死の村おこしの努力にも関わらず人口は減りつづけている。

美山町の村おこしは失敗だったのだろうか？

▼図５　京都府美山町の人口推移



▼表１　京都府美山町
観光入込み客数

年度	入込み客	宿泊者
S60	118,500	11,700
H元	243,200	32,517
2	268,100	37,941
3	273,000	41,878
4	277,000	42,508
5	302,700	48,877
6	371,200	60,232
7	406,000	80,192

ここに、京都府美山町に訪れた観光客についての資料がある。これを見ると、観光入込み客の数は、昭和60年から平成７年にかけて約４倍に増加している。そのうち宿泊者だけを見てみると、昭和60年から平成７年にかけて約８倍にもなっている。美山町の村おこしは成功だったのだ!!

その証拠に美山町は、「第１回活力ある美しい村づくりコンクール“21世紀村づくり塾長賞”」「第１回美しい日本のむら景観コンテスト農林水産大臣賞」など、ここ数年の間、さまざまな賞を受賞している。

(2)　アンケート結果

興味をもった市町村に送ったアンケートの返答のうち、興味深い内容のものを、いくつか紹介する。(質問は３つ)

①村おこしの具体的な内容

・トロッコ列車サミット（高知県西土佐村）
…日本各地から500人が訪ずれ、トロッコ列車の魅力について話し合う。

・ひまわり１戸１アール運動（兵庫県南光町）
…転作の作物としてヒマワリを集団的に栽培。８月中旬には約100万本の花が咲き、観光客の目を楽しませている。

・かわかみ山幸彦制度（奈良県川上村）
…全国各地で活躍する、川上村の出身者に、その他・その職場で、村のＰＲ、宣伝活動、また観光客の誘致を依頼する。

②村おこしを通しての変化

・四万十川を活かした観光という事が、10数年前とは比較にならないくらいの重みをもった（高知県西十佐村)。

・人口の増加は図れていないが、観光客もマイカー、ツアーなど多くなってきた。合わせて、民宿などの利用者も多くなり、生産販売組織協会による野菜の販売量も増えてきた（兵庫県南光町)。

・住民の意識改革が進んだ（奈良県川上村)。

・地域のお餅、おかき、村品など、今まで“お土産品”として扱われていなかったものが、売店に顔を出すようになった（〃)。

③村の自まん

・自然の豊かな事、豊富な緑、美しい水（どの村も共通）

村おこしというもののそもそものきっかけは、やはり“過疎化”だから、その目的は、人口を増やすことだと思っていたけれど、アンケートの結果を見て、必ずしも、人口増加が目的ではないことが分かった。

３．明日香の会

(1)“明日香の会”とは、奈良県明日香村が村おこしとして行っている「棚田ルネッサンス」のことだ。

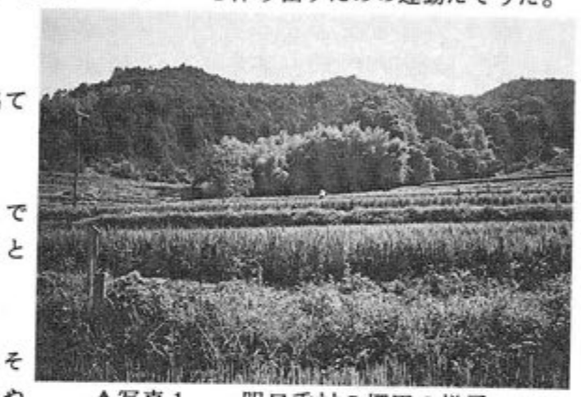
「棚田ルネッサンス」とは、貴重な文化遺産である棚田で、農業を媒体として都市との共生を図り、自然、農業、命を考え、自然回顧・人間性の回復というルネッサンスを起こし、新しい文化の発信や歴史・文化・芸術の郷づくりを目指した棚田を守る運動であるとともに、人と自然のすてきなハーモニーを作り出すための運動だそうだ。

(2)　農業体験

・５月11日　種まき・荒田起こし
…積んでいたわらからねずみが出てきてびっくりした。

・６月15日　田植え
…足がズボッと田んぼに埋まる。でも苗を植えるところに穴を開けるといけないので慎重にやった。

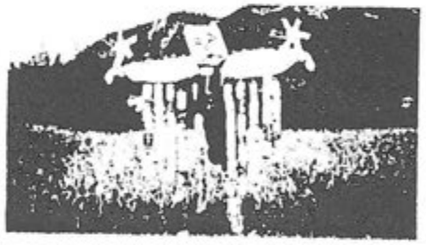
・８月24日　かかし立て
…９月21日のかかしコンテストにそなえて、８月19日に学校で、空缶やペットボトルを利用して作ったかかしを田に立てた。コンテストでは何の賞ももらわなかったが、10月12日の読売新聞に僕達の案山子がのった。


▲写真１　明日香村の棚田の様子

(3)　感想

日差しの強い炎天下の中での畑仕事は大変だった。土とじかにふれる、貴重な体験ができて良かった。

▲写真２　教大附天王寺の田（８月下旬）



案山子の顔も複雑に

わたしの目

林業　中谷　雅美（和歌山県伊都郡）　67

奈良県明日香村で行われた、案山子コンテストの力作の一つです。空き缶を利用したもので、風に揺られて雰が出るのでしょう？　なかなかのアイデアですね。

今年は豊作。しかし、コメ余りで政府は減反、転作をしない農家のコメは買い上げないとか。そのせいか、豊作を祈る案山子の顔も複雑に見えますね。

▲図６　読売新聞（'97、10．12）

▲写真３　案山子コンテストの様子

Ⅳ　結論　（考察）

高度経済成長期などに人々はどんどん都市に流れ、農村は“過疎化”という深刻な問題を抱えた。村おこしは、こういった背景の中で、「何とか自分の村の立て直しをはかろう」と各地で生まれた。しかし、うまくいった村もあれば、なかにはそうでない村もある。研究を通して、村おこし成功の秘けつを自分なりに考え、まとめてみた。

1．明確なキーワード（主旨）

→自分の村の村おこしが一体どういう主旨に基づくかを、都市の人々に、そして地域住民に分かりやすくアピールすることが大事だ。

2．オリジナリティあふれるイベント

→村おこしで一番重要な鍵をにぎるのが、イベント。地域の特徴を活かし、他の村とは少し違った独自のイベントを開催し、積極的に都市との交流をはかるべきである。

3．自然との共存

→やはり、都会の人が「いなか」に求めるのは、安らぎを与えてくれる自然。自分の村の豊かな自然を最大限に活かすことが大切である。

村おこしも波に乗り始め、村も活気づいてきたこの頃。今度はマンネリ化しないように気をつけるなど、農村の挑戦は続く。

Ⅴ　総括　（まとめ）

村おこしなんて、良く聞くけど、その実態は全然つかめていなかった。しかしこの研究を通して、それに関わる人達の苦労・熱意をかいま見ることができた。アンケートの返答では、たった３つの質問にレポート用紙７枚で答えてくれた村もあり、村おこしに対する真剣な姿勢が感じられた。

“都会”という枠の中におさまっていては、わからない、気づかないものがたくさんある。たまには、緑あふれる“いなか”を訪れてみるのもいいのではないだろうか。

Ⅵ　参考文献

・国土庁地方振興対策室監修「平成５年度版　過疎対策の現況」
・吉野雅美「農村は挑戦する」現代書林
・井戸川隆夫「全国町おこしイベント成功事例集」ＷＡＶＥ出版